

## 「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

平成 25 年 2 月 26 日（火）13:00～13:15

さいたま新都心合同庁舎検査棟 7F

発言者：公述人 21

私は、長年用地交渉と苦情処理をやってまいった■■と申します。きょうは、国交省の方、だいぶ立派な方こられているようですが、ちょっと辛口になるかもしれませんので、あらかじめご了承願いたいと思います。まず、苦情処理だとか用地交渉をしていますと、いろいろな苦情をたくさん私は受けたのですが、湧水などに対してはもうどうしようもないですね、苦情処理といっても。そんな関係で、埼玉が水が少なくなると見沼代用水とかそういうところに行ってお願ひに行くと。見沼代用水の方というのは非常によく知っているんですね、いろいろなことを。そのたびに怒られたのですが、結局は、利根川の基準点になっていますね、八斗島が。あそこの22, 000 m<sup>3</sup>/s に対しても、非常に不満がありまして、あんなことでちまちましたことで良いのかと、よく怒られたわけなんです。それで、荒川なんかですと上流にここまで水が上がったということが印がしてあるのですが。わたしも見に行くと、あんなところまでほんとうに上がったのかなというような感じなのです。結局、見沼代用水の方からだいぶ私が、県と国と代表していつも怒られていたのですが、私はどちらかという苦情処理ばかりやっていたので、用地交渉もやっていましたが。その時の話によりますと、荒川はそういうふうな既往のものをいくらか、それを参考にするとばかでかいものになるので、その当時は、確かに出来ないよとわたしも実は思ったのです。下流の六堰あたりまで山崩れがあった、あそこら辺に堰上げしたんだろうと。そんな話を、いくら私が少ししましたら怒られまして、ふざけるんじゃないと。あの寛保の大水害の時というのは、筏も何も流しているわけではない。現場に行ってもらえばいいけど、あれだけの川幅のところそんな崩れたくらいで、直ぐにつかえるはずがないんだと。それで、明治43年の時に飯能の吾野駅、西武線の吾野駅の前で山崩れがあって、堰が出来てしまって水がどんどん貯まってくというふうな状況が起きたと。あれはまだ川幅が狭いから、あのようなことが起きたという話です。それよりも、国の人が一生涯懸命やってきて、ダイナマイトとか何か使って発破してくれたから、たいしたことはなかったといいながらも、下流には害があまり出なかったらしいですけど。私は、あの辺に用地交渉したら、道路のところ川が流れたり、川のところへ民地があったりとか、公図がめちゃくちゃだったです。堰より上の湖の方ではなくて、下流の方です。やはりダイナマイトで発破した時に、みんな避難させられたらしいです。発破かけて、下流には被害がなかったけど、あの辺にはずいぶん被害が出た。そんな同じような状況があれば、必ず記録が残っている。だから、あの水と書いてあるものを、国の人はおのりやるのでは、とても出来ないということで、あのようなものを否定している。あんなに上がったわけではないと。これに縁がありますが、奥貫友山って方がいらっしゃるのですが、私の住んでいるそばに。この方はすごい人で、大水記というものを書いているのです。その時の水位のことを、少し書いていて、この人は、10万人以上の被災農民を自費を払って助けているんです。その他に、あそこにフジヅカというのがあるのですが、そこに1万何千人だか上流から流れてきた水死体を、この人が中心になって引き上げて、そこに葬ったわけなんです。フジヅカというのなのですが、そここのところあたりのてっぺんくらいまで水位が上がったという記録が残っているのです。この人も言っていますが、それはあくまでも洪水後の水位で、川の水位をいっているのではないというふうなことをおっしゃっていました。利根川

の八斗島の下流にショウレンジというのがあるのですが、そこの水位か何かを基準にして、私はその場所をよく知らないのですが、見沼代用水の人にいわせると、そこを基準にして学者は使っているいろいろなシミュレーションみたいのをしているようだけど、やはり八斗島より上流の洪水痕跡だとか、地元の人意見を聴くとか、古老とか。弥惣兵衛さんって昔の人なのですが、見沼代用水を造った人なのです。その人は半年で、見沼代用水を利根川から浦和の方まで引いてきた人なんです。その間に138橋あるんです、新しく架けた橋が。それを半年でやってしまった人なんです。調査は、実は2年くらいかけてやったんです。地元の人に聞きますと、上流の方をみんな歩いてまわったそうなんです。秩父の奥だとか、利根川の奥だとか、みんな歩いて古老だとか水防やっている方たちの頭の話の話を聞くとか、いろいろなことをしまして、それで計画を立てたと。昭和39年の大洪水の時も、見沼代用水の施設を使って、武蔵水路なんか使っているわけです。なんか、見沼代用水の役員だけで1万7千人くらいいる。その総括やっている方から、私はいつも怒られていたのですが、そういうふうな洪水痕跡みたいな、弥惣兵衛さんという人は非常に熱心に丁寧にやっていた。弥惣兵衛さんというのは、非常に官僚なんだと。河川官僚というのは昔から凄かったと。明治以降の河川官僚も凄かったんだとわたしに話して下さった。荒川なんかあんなに酷い。民家までを抱き込んで堤防なんかを造る。いまでも堤外の方に。堤外というのは、川が流れている方なんです。そこの方に家そのまま建っているんです。あの当時にしたって、そんなことは簡単にはできないんです。用地の関係であの人たちに話を聴いたら、まあ実に情熱と熱心だったと。まあ、田んぼや畑に行くのに大変ななのでという話ですね。それよりも、川のそばに住んでいるから災害のひどさを身にしみてわかっているの、どうしても協力したと。建設省の人の知識と自信と、地元の農家のことなんかもよく知って。やっぱり、よく知っていないと、そんなことできませんよ。見沼代用水の長い間、会長をされていた■■■■さんというのがいるので。その方から年賀状をもらったのですが、最近建設省の官僚は弱くてしょうがない。なんか昔の人のほうが骨があって、知識と自信といろいろなことをよく知っていて、喧嘩するのに張り合いがあったという年賀状をいただいた。やっぱり、自信を持ってやってもらわないと困るというふうな話を、私が代わって怒られたような感じですね。見沼代用水の人がだいたい怒ってしまっていて、なんか東京都が水が余っているような話を聞いたら、もう東京には水をやらないと怒っているんですね。埼玉はこんなに水が少なく、農業用水を当てにして。都市用水どうして融通しあえるのかと。下流の東京が水飢饉で、オリンピックの水飢饉でどうしようもないから協力したんだと。やっぱり、弥惣兵衛さんが、あそこを口にしたのは何百年も調べてみたら、あそこが地形が一番変わっていないということなんです。ということは、その他のところはみんな変わっているということなんです、洪水で。その洪水で変わっていて、あそこが一番丈夫だと。ところが堤防というのは、こっちにも書いておいたのですが、1か所だけ強化するとその強化したところに天罰が下るという話がある。そこから破堤するんです。強いところの周りが弱くなるからなんです。堤防というのは、同じような強度でずっとやっていかななくてはならないのですが、急いで修復しなければならないので。利根川の堤防なんかもだいたい痛んだようなんですが、地震の時に。そんなことで、堤防を何とかするというのは至難の業だろうとわたしは思います。私もこの目で2回破堤したのを見たことがあるのですが、水位が上に行かない前に堤防がどンドン孕んできちゃって、どうしようもない状態になってパンクするようなかたちですね。水位のどうのこうのよりも、堤防自身が液状化を起こしてしまうとかいろいろな関係で。平成10年に川越に13mmという300年に一度といわれるような、時間雨量13mmですから。それが降りまして、国の人がいるから怒られてしまうかもしれませんが、用地交渉をしていたら、こんなちまちました計画では協力できないという話で、内緒で少し広げたわけなんです。それでも、この有様ですよ。これは、夜が白々明けてその時撮った写真ですが、この水防団の指揮は私が

執ったものですから必死だったです。私に何かやることはないかと地元の人というから、病気で寝ている人とかそういう人を助け出してくれと。ここまで水位が上がったって人がいて、お陰さまで地元の人が頑張ってくれたおかげで、床上浸水千件以上出たのですが、死者が1人も出なかったですね。後で、■■■■さんって河川の大御所がいるのですが、その方に講演を頼んだ時にこの話をしましたら、やっぱり計画はきちつきちしたもので駄目なんだと、相手が自然なんだから余裕を持たせるのは良いのだと。国の人に怒られてしまうといたら、いや良いんだよと。例えば22,000m<sup>3</sup>/sを、当面の20年かなんかで17,000m<sup>3</sup>/sにするなんて、これを見沼代用水の人がこんなこと聞いたら怒りますよ。ぐずぐずしている上に、またそんなに下げてしまってどうするのかと。泣きを見るのは我々なんだと。洪水が来たら逃げれば良いというけど、命より大事な田んぼとか畑をどうやって逃がすのだと。原次郎さんも書いていますが。これに絵があるのは、資料館で私が貸してくれないので書いたのです。遠くに川越の時の鐘が映っていますけれど。泣きを見るのは我々農民なんだと。田んぼとか畑にいろいろなものが入ってしまうと、どうしようもないと。娘がいれば、娘1人女郎に売払うとか、娘がいなければ一家心中とか、そんな感じでやってきているのだと。ふざけるんじゃないと。逃げるなんてことが出来るかと。山の方は逃げる場所があるけれども、こっちの方は逃げるところなんかありゃしないと。特に下流の東京、江戸川区なんか逃げるところなんかありゃしない。まあ、スーパー堤防で逃げるところが出来たみたいだけだという話をされていました。この原次郎さんという人は、45年間、切れた堤防修復をみんなと働きかけてやった人なんです、この人の先生で大川平三郎というのがいるのですが、この人は大川堤だとかあって、二瀬ダムだとか一生懸命やった人なんです。原次郎さんという方は、ここにも書いてあるように「治水事業の如く効果のよく判る事業は少ない」というようなことを書いていますね。あとで大川先生がダムも下流でいくらやったってどうしようもないと。姑息な手段をとってはどうしようもないと。上流にダムを造ってもらうんだというので、この原次郎さんも、ちっぽけなダムなんです、国の人の前では笑われてしまうんで、有間ダムというのを一生懸命。国の人なんか、埼玉やったことないので、国の人なんか原次郎さんが連れてきてくれたんです。川治ダムとか五十里ダム、あれをやったのですが。私どもは小学校の時から原次郎さんの勉強をさせられました。郷土の偉人ということで。つい最近になったら、荒上さんのところに原次郎コーナーといったのがあったのですが、いつの間にかなくなってしまったんです。私も、原次郎さんの絵を川越の展覧会で書いて出したんです。洪水の時と、国の人が生懸命やった河川改修の絵と一緒に付けて。3枚書いて1枚の絵にしたんですけれど。そうしたら、あとで展覧会の関係者の方からずいぶん大勢の方が見に来られたと。その前で涙をこぼす人とか、拜んでいる人もいたと。それはそうなんで、こちらは子供のころから勉強しているので。原次郎さんが一生懸命やったというので、川越の人からもあの人がいなければ、川越は慢性的な洪水から逃げられなかったんだと。非常に感謝している人が多いのです。この人も、国の人には大事だと、国家公務員は凄い実力を持って力になったということなんで。まあ時間のようですから、ちょっと失礼したかと思いますが、これで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

以上